岩泉農業紀行 3

名実ともに大型酪農の経営
岩泉町室場
三田地義正さん

酪農岩泉も個々の生産力をみると一戸当り搾乳量約60kgと決して大きなものではない。その中にあって名実ともに大型酪農の経営者として活躍している三田地義正さん（四十一歳）を岩泉町室場のお宅にお訪ねした。

牧場の朝

朝四時半。満天の星のもとで三田地牧場の一日が始まります。ラジオの「早起き鳥」の流れる中、牛舎で作業にあたるのはご主人の義正さん、奥さんのキヨさん、それに親戚の娘さんの熊谷十九子さんの三人。牛舎の掃除、牛の体にブラシをかけ、お湯できれいにふき、キビキビした動きで搾乳の準備が進められます。ミルカーをセットするかたわらで義正さんは手早く一頭搾乳してしまいました。乳房がきれいにふかれてパイプラインミルカーが作動。ガラスのパイプを白い牛乳が走り、バルククーラーで冷却されます。こうして約一時間半。三十七頭の搾乳が終るころに空が白みはじめます。搾乳の後始末をしてから飼料を与え一息。八時二十分頃農協のタンクローリーが集荷にきて朝の作業を終ります。

機械化酪農

田野畑村に接する室場地区は標高500m前後のなだらかな地形が続きます。一見農業適地に見えますが、花崗岩が崩壊してできた堆厩肥を入れないと牧草も育たないやせた土地です。乾草を作る六、七月にはヤマセのもたらす霧と決してめぐまれた条件ではありません。

このような中で160m²の牛舎に搾乳牛三十七頭、育成牛三十頭を飼育し、年間190tの牛乳を出荷する大型酪農が経営されています。経営の基盤となる採草地は16haで飼料自給率も高くなっています。四基のサイロで通年サイレージを与えていて、これが功を奏して年間一頭当りの搾乳量は7,015kg、平均脂肪率3.57%、平均無脂乳固形分8.50%と高い水準を維持しています。三人で多頭飼育できる秘密は設備の機械化。搾乳は岩泉で最初に設備したパイプラインミルカー。バルククーラーも昭和四十八年にいち

◀手搾りの牛乳もバルククーラーへ

はやく導入しました。糞尿の処理はバーンクリーナーと固液分離機で畜産公害の防止にも力をいれています。

このような経営内容が評価されて昭和五十六年度の岩手県酪農経営共励会で優良賞が授与されました。本格的に酪農に取り組んだのは昭和四十六年からなそうですがわずか十一年の間に県内でも上位の経営を築き上げた原動力は何だったのでしょうか。

経営の転換

三田地さんのお話を伺っているといつも進取の精神が旺盛なことがわかります。学校を卒業したての頃には果樹経営をこころざしていました。一年間の研修を経て昭和三十五年にはリンゴの苗木を百三十本植えつけ、見事な果樹園ができ上りました。ところがリンゴは作っても販路がなく、食える農業をするために販売の心配のない酪農に経営を切りかえました。この時「父親の反対を押し切って一本残らずリンゴの木を切り倒した」と淡々と語っていましたが「よっぽど思いきんないと切れネェのス」と当時の心境の一端を洩らしてくれました。

三十歳のとき制度資金を導入して「のるかそるか命をかけて」一気に規模拡大、当時としては大冒険だった機械化にふみきりました。このとき畜舎建設と並行して草地を6ha造成、まず飼料基盤を整備しました。

設備投資を行った直後にオイルショックが到来、「乳価が一気に高くなった。最高に運がよかった」と述懐する。「農協のバックアップがなければこれまでになれなかった」と語っていましたが本人の経営努力も相当のもの。乳質の改善をはかるため問題のある牛を一ぺんに七頭も処分するなど苦労もあったようです。経営管理をキチンとするため記帳を行い五年まえから税金の青色申告をしています。「経営不振を農協や行政の責任だという人もいるが自分の仕事を他人に決めてもらうなんて理解できない」ときびしい。「子供に誇れるような経営をすれば後継ぎは自然にできる」と胸を張っていました。

▶パイプラインミルカーガ手早くセットされる

◀タンクローリーで出荷

◀ゆったりくつろぐ乳牛